

P01:ARTIST in RESIDENCE PROGRAM 2006 「西雅秋—彫刻風土—」(2006.10.25-11.16)東北芸術工科大学芸術研究棟A / 西雅秋と学生スタッフによる制作風景。

P.02-03:「西雅秋—彫刻風土—」(2006.10.25-11.27)東北芸術工科大学7階ギャラリーにおける展示風景。

P.04:シンポジウム「神秘の樹と明日の鳥たち—詩・旅・思索—」(2006.10.28)で柳田國男の民俗学について語る吉増剛造。

P.05:「西雅秋—彫刻風土—」開催記念舞踏公演「彫刻風土—一時の潮上—」/2006.10.28 /水上能舞台「伝統館」における森繁哉の舞踏。

P.06-07:「旧新報」/吉増剛造/コピー用紙にカラー印刷 / B4 (cd × 200) /シンポジウム「神秘の樹と明日の鳥たち—詩・旅・思索—」(2006.10.28)で聴衆に配布され、朗誦されたテキスト。

P.08-09:学長就任記念「松本哲男展—鼓動する大地—」/2006.4.1-20 /東北芸術工科大学7階ギャラリー/作家によるギャラリートーク風景。

P.10-11:「作座考—BANDED BLUE 2・東北芸術工科大学の7作家—」/2006.6.24-7.9 /出展・和太守卓良、佐々木里知、小林伸好、水上修、金子透、降旗英史/会場構成・竹内昌義/生け込み・三橋光彩(いけばな小原流)/鶴岡アートフォーラムでの展示風景。

P.12-13:卒業生支援センター企画事業「I'm here.2006—リアルはどこだ—」/2006.9.22-27/せんだいメディアテーク6Fギャラリー4200b/岩本あきかずの展示ブース(右)、鈴木伸による映像インスタレーション。

P.14-15:「父に買ってもらった鉄」/新関俊太郎(美術家工芸コース4年)/3200×3200mm・鉄/東北芸術工科大学卒業/修了研究・制作展2006(新実習棟C)における展示風景。

P.16:OUR ART. OUR SITE.東北芸術工科大学卒業/修了研究・制作展2006開催記念シンポジウム「東北発・21世紀のデザインとアートはどこへ向かうのか?」/2007.2.14/本館201講義室 茂木健一郎、酒井忠康、宮島達男(司会)によるレヴュー風景。PC画面は洋画コース・南健吾の作品。



P.01



P.04-05



P.08-09



P.12-13



P.16



P.02-03



P.06-07



P.10-11



P.14-15

美術館大学を構想する、「良心」と「Locality」 酒井忠康

20

「心を活性化する運動」としての美術館大学構想 山田修市

22

「つながり」の愉楽へ—二〇〇六年度の美術館大学構想— 宮本武典

23

美術館大学構想シンポジウム

24

神秘の樹と明日の鳥たち—詩・旅・思索—

鼎談採録/赤坂憲雄×吉増剛造×酒井忠康(司会)

24

美術館大学構想企画展+ARTIST in RESIDENCE PROGRAM 2006  
西雅秋—彫刻風土— 対話採録/西雅秋×酒井忠康

展覧会レポート/宮本武典

40

東北芸術工科大学学長就任記念

松本哲男展—鼓動する大地— 対話採録/鎌田東二×松本哲男

60

OUR ART. OUR SITE.

70

東北芸術工科大学卒業/修了研究・制作展 2006

基調講演Ⅰ/茂木健一郎 基調講演Ⅱ/酒井忠康 公開レビュー/茂木健一郎/酒井忠康/宮島達男(司会)

鶴岡アートフォーラム企画展  
作座考 BANDED BLUE 2 東北芸術工科大学の7作家

82

卒業生支援センター企画事業

I'm here. 2006—リアルはどこだ— 展覧会レポート/宮本武典

88

収蔵品一覧

92

TUAD EVENT CALENDAR 2006

94

美術館大学構想に携わったことで、私はこのごろ「美術館」と「大学」との相違点についてよく考えています。まず、学校というのは毎年新しい人が入ってくる循環作用があり、絶えず出会いと別れを繰り返します。美術館にはそうした循環性は存在しません。美術作品は美術館に収蔵されると、時代との運動性はある意味では消失し、「モノ化」してしまうのです。けれどもその反面、美術館で開催される展覧会は、鑑賞者の記憶に、ある種の感動を引きずって残っていくことがあります。

大学にとってもっとも重要な財産は美術やデザインを学ぼうとする、意欲的な学生たちです。私の考える「美術館大学」とは、高価な美術品を収蔵することよりも、良質な展覧会やシンポジウムの開催を通して、感動をきちんと伝えていく、芸術的感性の伝播を試みることで、優れた展覧会やシンポジウムを大学で開催することができたら、卒業していく学生たちの人生の大きな糧になると考えたのです。

しかし、教育機関で展覧会をつくりあげていくには、いくつかの問題と向き合わなければなりません。まず、大学の教員はあくまでも教えることが専門であって、毎回の展覧会をオリジナルで運営できるはずがない。どこかで前年の踏襲のような、前にやったことを多少変化させた内容になってくる。日本は「おさらば」の国だし、免許の国ですから。そして、文化や芸術を「継承」することに重きをおく国です。これは、ある部分では美術館も同じです。高度成長期とか景気のいい時代には、まず「箱」としての美術館を建設して、中身や地域社会とのコミットについては後回し、という傾向がありました。その結果、今日では社会における美術館活動のトータルな存在意義が形骸化しつつあります。大工はたくさんいるけれど棟梁はいない、という感じです。設計図だけはあるから家はできる。箱があるし、予算もあるからカリキュラムや展覧会スケジュールは組める。けれども、そこに「魂」が入っていないのです。例えていえば、今は木を平気で切りますが、昔はちゃんとお神酒をかけて、お祈りしてから切っていました。今やそれは迷信です。命あるものを切る上での礼儀が失われ

ている。つまり、何を残し、何を削るべきかをきちんと判断する、経験や伝統に裏打ちされた哲学が曖昧なのです。

それから経営の問題があります。山形市の人口二五万は、美術館ではかなり苦しい数字です。これが八〇万〜一〇〇万あれば、状況はまったく異なります。東北芸術工科大学でも、仙台にサテライトを開設し、近隣の都市エリアまで範疇に入れて企業としての大学経営を持続させようとしています。徹底的にマーケティングにこだわるのならば、教育活動の副産物である伝統工芸とか、プロダクトデザインを、大学と都市部の間で流通させるシステムを構築するなどの方策もあります。けれども、そういう市場経済への大胆なシフトチェンジには、美術館も大学も、まだ躊躇があるようです。

格差社会・構造改革の時代にあって、この二つの、日本の文化を担う公共的な場の形骸化と、経営の困難さは、私たちの社会における本質的な問題です。しかし、それでも、美術館大学構想のグランドデザインにおいては、私は、自分自身が美術館館長として大切にしている言葉Ⅱ「良心」に、あえて固執したいと考えます。

あの福沢諭吉が亡くなったとき、アメリカの新聞は、「彼の生涯は『シンブル・ライフ』であった」と書きました。日本語に置き換えるに、微妙なニュアンスなのですが、この形容はつまり、「変な野心がない人間」という肯定的なものだったと思うのです。時代や政府にへつらうことなく、自分独特の人生観を持って生ききった、ある種の「良心」に殉じた男、という意味だと理解しています。美術館にも大学にも、経営は確かに重要です。けれども感動を生み出すのは、あくまで「良心」であり、これを軸に、ある種、情操的に運営を支えていかないと、芸術文化や教育現場というのは、どんどん衰退してしまうのではないのでしょうか。

東北芸術工科大学の存在とその取り組みが、現代日本のアートシーンで強いオリジナリティーと、「良心」を体現していく上で、不可欠なキーワードが、「ローカリティⅡ Locality」です。山形を舞台とする本構想においても、東北の地域社会や風土に根を深く張ることが大前

提なのです。これは、本学の芸術教育においても同様です。美大志望者が予備校的なスキルを鍛えて偏差値を高め、東京や関西の名門校に入学しようと思ったら、自分の出自における感性の根っこを殺して、同じ土俵で勝ち抜いていかなければならない。ところが、ローカリティとは、自分の土地に執着したり、風景にまつわる、どこか不可解な理由でじっと思考し、立ち止まったりという、世界の認識の仕方に深く関わっていて、そういう資質を持つ学生は、どうしても偏差値はあがってこない。自分の中に基準があるわけですから。しかし、表現者にとつて、これこそがもっとも重要な素地となるのです。経営的な観点を無視してあえて言えば、東北芸術工科大学はアートシーンにおける偏差値やヒエラルキーに従属する必要はまったくくない。

どんな大河も、いろんな支流から水が集まって形成されるわけですが、現代はこの支流自体が、非常に不透明な状態なのです。つまり情報が多すぎて、本流になったときに、自らの出自、つまり、支流の確認ができないのです。「世界美術」といっても、何か焦点がボケてしまつて、結局、国力のあるアメリカやイギリスとか、美術の伝統のあるイタリアやフランスが市場や価値をコントロールし、その他の周縁的な国は、本流に寄生するような鮎脈をたどることばかりしています。このような状況だからこそ、美術館や大学は、都市に本流が一極集中化する、地方の地理的・情報的なハンデを、犠牲的に支えていこうという自覚と覚悟を明確にすべきです。

例えば、本学と姉妹校の関係にある京都造形芸術大学は、都会の大学ですから情報のキャッチ力もあり、アートシーンをリサーチするには恵まれた環境にあるといえるでしょう。現状では、山形と京都で学ぶ学生のうち、一〇人の優秀なクリエイターが出たとすると、山形から出るのはそのうちの一名かも知れません。けれども、その一人は、長い目で見たら京都の九人よりもずっと上でしょう。これは土地が持っているもの、つまり風土の魅力や独自性、つまり、先述のローカリティーに関する、自覚の力なのです。

美術評論家として、私がつとも興味深く研究してきたのが彫刻です。この表現領域では、作り手におけるローカリティーへのこだわりが、作品の善し悪しに決定的に作用します。美術館大学構想では、二〇〇六年度の企画展作家として、彫刻家の西雅秋氏を招聘し、『西雅秋―彫刻風土―展を開催しました。埼玉県の里山に工房を構える

西氏の作品には、物質が溢れているこの社会で、彫刻をいかに「つぐらない」ことから始めるか、というメッセージを表現しています。教育の場において、西氏のような文明批評的な視点をもつ芸術家を紹介することは、極めて重要だと考えます。

時代や自分の属する土地と、自己との関係を意識しながら、彫刻を学んでいく必要があるのです。例えば、山形ならば、鋳物工場で実地学習をするとか、山奥に行つて鋳場たなほについて「聞き書き」をしてくる、また、石切り場の発破などは実にダイナミックなのです。ありきたりな彫刻概念など、ひっそりかえつてしまふ。東北というフィールドをフルに活用しながら、「芸工大は基礎教育が違う。足腰が違う」と評価されるような、魅力的な実地教育を展開することが可能なのです。

それから、美術館大学構想では、年に一回のシンポジウムの開催を通して、横断的に芸術を語る、詩的な「言葉」のあり方を探っています。イギリスでは、特にオックスフォード大学は教育に詩学を積極的に取り入れています。私たちのプロジェクトは、特に、「美術館」という空間的な実体は持たないけれども、美術館大学を「構想する」というスタイル自体が、すでに詩学に近いものになってきています。これまで、藤森照信氏、吉増剛造氏、赤坂憲雄氏、芳賀徹氏、茂木健一郎氏、宮島達男氏をお招きしたシンポジウムは、最終的に、私の考える美術館大学の「良心」の持続を支えていく、思索的なバックボーンになると思います。

東北・山形における美術館大学設立プロジェクトは、この春で企画事業に着手してから三年目を迎えました。当初は、二〇〇七年度に一旦の集約を想定していましたが、まだその完成形というか、本流へつながる出口は見えていません。未だ、「美術館大学」の入口を、幅の広い、より大きな可能性を含んだ、魅力的なものにするための試行錯誤が続いています。ゆっくりと時間をかけて、頭を柔らかくして、時代や体制に迎合しない、ある品度を持った入口をつくりたいと考えています。

（世田谷美術館にて／採録・構成Ⅱ美術館大学構想室）

美術館大学構想は、この春掲げられた「藝術立国」というスローガンにも改めて位置づけられた、本学の建学理念を具現化する重要なプロジェクトのひとつです。構想の理念は、徳山評直理事長がかつて倉敷市の大原美術館を訪れた時の、直感的な閃きによるものでした。その内容は、昨年度の年報第一号にも詳しく記されていますが、「倉敷が戦時中に爆撃を免れたのは、大原美術館の文化的価値とその周辺の街づくりが優れており、そのことが世界的に広く知られていた」からであり、「芸術が戦争をも阻止する」という発想が原点であるといえます。このことに習い、本構想では「芸術による世界平和の希求」を意識し、レベルの高い展覧会やイベントの開催を通して、「芸術や文化を大切にする心」を地域の人たちに広める運動を進めています。

本構想は、二〇〇二年度の理事長の起草のもと、小沢明前学長によるエントランス改修（インフォメーション・パッサージュ設置）から動きだし、美術作品を大学構内に常設展示する試みの一環として、名誉教授を中心とした作品寄贈と卒業制作買上が本格的に始まりました。二〇〇五年度には、酒井忠康氏（美術評論家、世田谷美術館館長）が大学院博士課程教授の就任にあわせて本構想委員長に就き、展覧会やシンポジウムなどソフト面で事業を監修し、次第にその活動は在学生や地域の方々に知られるようになりました。

また、こうした独自の活動のほか、学内の様々な取り組みのうち展示という形で対外的に公開する事業には、学芸員の専門的な眼差しを通して、企画や運営に積極的に関わっています。これまで二回実施した卒業生支援を目的としたグループ展や、アーティスト・イン・レジデンス、文化財保存修復研究センターとことも芸術教育研究センターの企画展覧会、そして二〇〇六年度の卒業制作展の統一的開催などがそれにあたります。

その中でも卒業生支援展『In here.』は、これまでの二回は仙台を会場として開催してきましたが、二〇〇七年度は山形市の中心街にあるギャラリーや蔵と連携しながら、地元の街で展開していくことになりました。本学キャンパスを中心として、周辺地域に向けて遠心的に発

信していくという、本構想の方向性を示しているといえます。こうした活動が浸透して、次第に全国各地から人々が山形に集まってくるような、芸術的な街づくりの原動力となることを目指しています。

また一方で、文部科学省の現代GP（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）で取り組んでいる「芸術工房ネットワーク」との連携があります。この活動は、過疎化に悩む近隣の廃校を拠点に、芸術とデザインの力で地域に活力を取り戻そうとするものです。さらには、今は「点」でしかない各地域の拠点を、本学を核とした学生の活動と地域の人たちとのコミュニケーションを通じて「線」で結ぶことにより、山形全域をステージとした広域的な芸術文化運動に育てていきたい。さらには、理念を同じくする姉妹校の京都造形芸術大学との連携を強めることにより、この運動を広く世界に対して打ち出していきたいと思っっています。

しかし、こうした活動は一時的なものであつてはいけません。単に物質的なアートやデザイン作品をその場に持ち込んでおしまいではなく、そこに関わる学生や地域の人たちとのコミュニケーションを通じて、「心が活性化する運動」として、持続的に本構想の形を示していければと考えています。

（採録・構成＝美術館大学構想室）

## 「つながり」の愉楽へ ―二〇〇六年度の美術館大学構想―

美術館大学構想室学芸員

宮本武典

これまで、日本社会における種のマイノリティーであることを、暗に肯定するようだった美術大学の放任主義的な美術エリート教育は、少子化の影響で全国の大学が厳しい全入時代を爾々と迎えた今日、生涯学習の観点に則した芸術的市民育成への、抜本的な路線変更を余儀なくされている。この時代の流れに並行するように起草された、東北芸術工科大学の「美術館大学構想」は、発案当初は地域と大学とのつながりを具現化する「地域に開かれたキャンパス」創成という社会貢献事業としてイメージされていた。しかし、その活動のフィールドが年々キャンパスを出て、県内各所にひろがっていくにつれ、「東北における、芸術やデザイン教育の正統性とは何か？」という問いが、逆にこのプロジェクトに携わる私たち自身の内なる声として響きはじめてきたのを感じている。

市場経済の推移とともに目まぐるしく変容するこの国のアートシーンで、「東北」は物質に満たされた都市生活から照射された、土着や素朴、自然、といったステレオタイプなイメージを負わされる。いや、東北だけではなく、「地方」はあらゆる意味で、「都市」からの観光的なまなざしの受け手にならざるを得ない。そして、「東北で学ぶこと」と、デザイナーやアーティストとして華々しく成功することの因果関係が見えない多くの美大生たちにとって、東京から新幹線で三時間、「蔵王丘陵の自然豊かな環境」は、地理的なハンデにより生じる情報格差と、メインストリームのクリエイティブシーンからの周縁化を意味する。

こうした作り手側の意識と、本学が標榜する『東北ルネサンス』との（現実と理想の）ズレを引き受けつつ、私がキュレーションを担当した二〇〇六の展覧会事業では、とりわけ『西雅秋―彫刻風土―』展における西雅秋氏のバイタリティーは、圧倒的だった。「この場所に欠けているものをつくりたい」と、半年間の山形での現地制作に挑んだ彫刻家の仕事は、学生たちに「東北で学ぶ」から「東北から学ぶ」への、エポックメイキング的な価値の転換をもたらしたようだ。メイン会場となった七階ギャラリーのみならず、能舞台やフアサードの池の

中にまで設置された巨大かつ壮麗な作品群は、西氏が滞る制作のプロセスにおいて獲得した人的・物質的な関係のひろがり、山形の風土への深い共感を体現しており、この場で、しか生成し得ない美しさを発していた。

その一方で、西氏による山間部の廃校でのプロジェクト『CASTING RON ASAHIMACHI 06』（P55参照）の公開設置は、大学という大きな組織が、過疎化した地域に関わっていくことの難しさを考えさせる一例となった。農村地域における少子化、高齢化による農業の疲弊は深刻である。役場と粘り強く対話する際、「芸術は重要だ。デザインは有効だ」という大学側の自明の論理さえも自ら虚しく、無効性に引き戻されるのを実感せざるを得なかった。

一過性の祝祭として美術館や大学を飾る展覧会とは異なり、村の廃校や街道には、一代では築き得ない集積した共同体の記憶があり、そこに置かれる作品は地域の未来を負っていく。それなのに私たちは、村や里に無邪気に出ていって、自らの問題意識の薄さに呆然とするしかない（都合よく地方都市↓村↑事態は入札子状態になっている）。

こうした状況を受けて、酒井忠康氏の監修で開催したシンポジウム『神秘の樹と明日の鳥たち―詩・旅・思索―』では、芸術やデザインが、民俗学との詩的な連帯によって、土地に根ざした記憶や知恵を再び取り戻す道を模索する試みとなった。詩人の吉増剛造氏と民俗学者の赤坂憲雄氏の語りには、この国の風土史に関する膨大な知の蓄積を土台に、私たちの身体が内包する土地との交感感覚を揺り起こし、言語や芸術による風土との対話の豊穡さを示唆するものだった。

山形で展開する私たちの活動は、東北の風土の現在と常に対峙することで、従来のアートが気負ってきたミイイズム的な「自分探しの追求」から、根を失い、分断された「生」のフィールドを繙い直す、「つながり探しの実践」へと必然的に移行しつつある。このことは、閉塞感の漂う現代社会に向けて私たちが発信できる、ほとんど唯一と言っていい、アートやデザインの新しい価値の転換であり、創造への道だと考えている。